

## 障がいへの理解を広め、 より多くの義足ユーザーに スポーツを楽しんでもらうための活動を展開

スポーツ用義肢を扱い、義手・義足のアスリートを支える公益財団法人鉄道弘済会義肢装具サポートセンター。障がい者スポーツの門戸を広げようと、スポーツ用義足の板バネを貸し出すとともに、カーボン製よりも低価格で提供できるナイロン樹脂製の板バネを開発。さらに出張授業や同センターへの見学受け入れにも力を入れている。



### 公益財団法人鉄道弘済会 義肢装具サポートセンター



体験会・講習会



協賛



技術支援・  
製品開発

#### 企業情報

公益財団法人鉄道弘済会  
義肢装具サポートセンター

【所属人数】65名

【住所】東京都荒川区南千住四丁目3-3

【電話】03-5615-3313(代表)

【URL】<http://www.kousaikai.or.jp/support/>



### 板バネの貸し出しや開発で裾野を広げる



(右)義肢装具士の白井氏

同センターの義肢装具士・白井二美男氏は、個人的な活動として、約30年前から義足ユーザーを中心とした陸上チーム「スタートラインTokyo」を主宰。多くの義足ユーザーにスポーツの楽しさや体を動かす気持ちよさを伝え、国内外の障がい者スポーツ大会に出向き、障がい者アスリートをサポートしてきた。

障がい者スポーツの裾野を広げたい。そう考えた同センターは、2015年よりカーボン製のスポーツ用義足、通称

「板バネ」の貸し出しをスタート。

多様なアスリートに板バネを貸し、意見を聞くことで、新たな板バネの開発にもつなげている。

また、子ども向けにもっと手に入れやすいものにと、ナイロン樹脂製の板バネを開発し、2019年に意匠登録。この板バネは、大人の女性でも使用可能となっており、さらなる改良に取り組んでいる。



スポーツ用義足の製作

#### 理学療法士とともに初心者向け 走行体験会を実施

同センターに通っている1000人にアンケートを実施したところ、約30%が「スポーツをしてみたい」「板バネを

履いてみたい」と回答。しかし、実際にスポーツをするまでには至っていなかった。

「スポーツをしない理由の一つに、どこに行けばいいかわからないという声が多くなかったのですが、これには正直、驚きました。メディアで白井の活動を取り上げていただく機会が増えているので、ご存じの方も多いのではと思っていたのですが、こちらの想定以上に知られていなかったわけです。」と、中野啓史所長。



競技用義足を使用した  
走行体験会の様子



理学療法士と一緒に  
義足体験

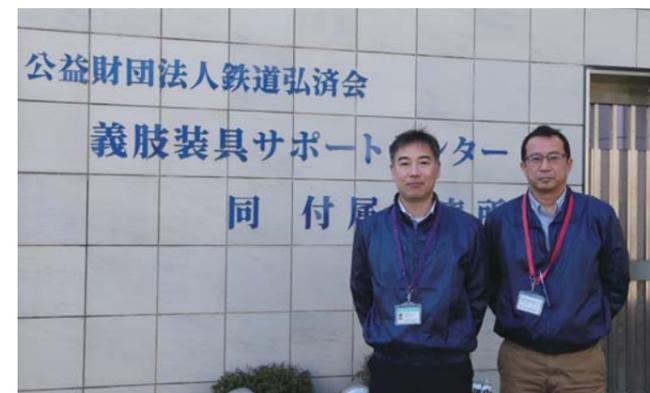
そこで、2017年より日常用義足を履いている方を対象に、同センターの屋上で競技用義足を使用した走行体験会「THE FIRST STEP」をスタート。走行体験会開催時は、診療所を併設しているため、理学療法士と義肢装具士のサポートに加え、医師や看護師も駆けつけられる環境にあり、安心して板バネ体験を楽しめるようにしている。「ほんの数カ月前に社会復帰し、歩いたり走ったりしている方たちを見ると、切断直後の入院患者は、少し先の自分の姿を思い描け、大きな励みになるようです。」(中野所長)

#### “義足ユーザーも自分たちと同じ” 子どもたちが実感できる出張授業

同センターでは、展示室の見学だけではなく、患者のリハビリの様子を見たり、義足体験も行っている。下肢を切断してから、義足を履いて歩けるようになるまではもちろんのこと、街中を義足で歩くことがいかに大変か、さらに、障がい者アスリートが、板バネで跳んだり走ったりすることがいかにすごいかを実感できる。

また、出張授業も行っており、義足ユーザーも自分たちと何ら変わらないということ子どもたちに知ってほしいとの先生方の声を受け、義足の職員が同行している。

そして、義足体験とともに、義足の職員が下肢切断に至る経緯を話したり、板バネで走る様子を見せたり、子どもたちに断端(切断部)を触ってもらったりしている。同センターの活動の様子を鉄道弘済会内のイントラネットで発信することで、全国に点在する各事業所間一体感が生まれ、帰属意識の醸成にも一役買っている。出張授業には、次世代育成の意味も込められている。下肢切断の理由の多くは糖尿病や腫瘍といった病気で、高齢の方が多く、義足のニーズもそのほとんどが日常用であり、スポーツ用義肢のニーズが少ないため、義肢装具士も増えにくい。全国に約4000人いる義肢装具士のうち、スポーツ用義肢に関わっている者はほんの数人で、明らかに不足しており、義肢装具士の育成が急務である。今後も、同センターの取り組みは続く。同様に、企業や団体、学校でも障がい者スポーツ支援や障がい者理解への取り組みを続けてほしいと願っている。「障がいや義足を知ることは障がい者スポーツ支援の第一歩となり得ます。そのきっかけとして、ぜひご活用いただけたらと思います。」と、打越昭宏総務課担当課長は語る。



(左)打越課長 (右)中野所長

#### コロナ禍における取組・今後の方向性

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、例年実施していた「THE FIRST STEP」や出張授業等のイベントの再開は未定の状況である。しかし、毎年開催している「義肢装具サポートセンター施設公開」のオンライン開催を当センター初の試みとして実施した。今後は、「withコロナ時代」に適應するため、積極的なオンライン化を推進していく。